

高等学校の柔道部における指導者への依存性

－競技種目・性別・競技水準・指導者の性別からの検討－

堀川奈津美（筑波大学）

1. 目的

運動部活動は、学校教育における課外活動の一つとして位置付けられている。その、教育的な意義としては生徒の自主性、協調性、責任感、連帯感などの育成が挙げられる。しかし、近年の運動部活動の現場では成績向上のみに関心が置かれてしまい、生徒の自発性や独創性が育まれにくいことが指摘されている。このような問題に対して、本研究では、高等学校の柔道部に所属する生徒の指導者への依存性に関して「依存欲求」と「統合された依存性」の2側面から調査を行い、競技種目・性別・競技水準・指導者の性別から比較、検討していくことを目的とする。

2. 方法

1) 対象者

第65回関東高等学校柔道大会の団体戦に出場している59校(男子・女子)の柔道部員

2) 調査方法

質問用紙調査を行った。質問項目は、フェイスシートと生徒の指導員に対する依存性について尋ねる13の質問を設け、それぞれの質問に対して5件法で回答を求めた

3. 結果と考察 (MSゴシック 10.5ポイント)

対象者全体における特徴としては、指導者への依存性を示す全ての項目において中央値を上回っていた。

競技種目による比較では、柔道競技は集団競技に比べ指導者への依存性が高く、統合された依存性を示す項目においては極めて高い平均値を示した。柔道競技と集団競技とでは、生徒と指導者との関係性に大きな差があり、柔道競技の方が指導者に対する生徒の依存性が高くなるということが分かった。

性別による比較では、依存欲求に関しては男女における大きな差は見られなかった。統合された依存性に関しては、男子の方が高い依存性を示し、その

差も大きかった。女子の比べ、男子の方が指導者と成熟した形での依存性として相互依存的な関係であることが分かった。

競技水準による比較では、競技水準の高いグループの方が統合された依存性の平均値が高く、依存欲求は低くなる結果となった。特に男子においてはその差が顕著であった。

指導者の性別による比較では、女子生徒のみで比較を行ったが、同性またはその両方が指導者である生徒の方が統合された依存性が高くなった。同性の指導者の方が関わりやすい傾向にあるということが分かった。

4. 結論 (MSゴシック 10.5ポイント)

本研究では、高等学校の柔道部の生徒の指導者の対する依存性について、様々な視点から比較、検討することができた。今回の結果を踏まえ、実践の指導現場で役立つ知見を得ることが今後の課題と考える。

5. 主な参考文献 (MSゴシック 10.5ポイント)

- 1) 小玉正博・竹澤みどり, 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討, 教育心理学研究, 52巻(3号): 310-319ページ, 日本教育心理学会, 2004年.
- 2) 松井幸太, 運動部活動における生徒の認知する指導者像と生徒の依存性 -性別・学年・競技水準・競技種目からの検討-, 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 28巻, 121-130ページ, 鳴門教育大学地域連携センター, 2014年.
- 3) 永島正紀, スポーツ少年のメンタルサポート -精神科医のカウンセリングノートから-, 講談社, 2002年